

# 金將軍

芥川龍之介

青空文庫



ある夏の日、笠をかぶった僧が二人、朝鮮平安南道竜岡郡桐隅里の田舎道を歩いてきた。この二人はただの雲水ではない。実ははるばる日本から朝鮮の国を探りに来た加藤肥後守清正と小西摂津守行長とである。

二人はあたりを眺めながら、青田の間を歩いて行った。するとたちまち道ばたに農夫の子らしい童児が一人、円い石を枕にしたまま、すやすや寝ているのを発見した。加藤清正は笠の下から、じつとその童児へ目を落した。

「この小倅は異相をしている。」

鬼上官は二言と云わずに枕の石を蹴はずした。が、不思議にもその童児は頭を土へ落すどころか、石のあつた空間を枕にしたなり、不相変静かに寝入っている！

「いよいよこの小倅は唯者ではない。」

清正は香染めの法衣に隠した戒刀のへ手をかけた。倭国の禍になるものは芽生えのうちに除こうと思つたのである。しかし行長は嘲笑いながら、清正の手を押しとどめた。「この小倅に何が出来るもんか？ 無益の殺生をするものではない。」

二人の僧はもう一度青田の間を歩き出した。が、虎髯の生えた鬼上官だけはまだ何か

不安そうに時々その童児をふり返っていた。……

三十年の後、その時の二人の僧、——加藤清正と小西行長とは八兆八億の兵と共に朝鮮八道へ襲来した。家を焼かれた八道の民は親は子を失い、夫は妻を奪われ、右往左往に逃げ惑った。京城はすでに陥った。平壤も今は王土ではない。宣祖王はやつと義州へ走り、大明の援軍を待ちわびている。もしこのまま手をつかねて倭軍の蹂躪に任せていたとすれば、美しい八道の山川も見見る見る一望の焼野の原と変化するほかはなかつたであろう。けれども天は幸にもまだ朝鮮を見捨てなかつた。と云うのは昔青田の畔に奇蹟を現した一人の童児、——金庇瑞に国を救わせたからである。

金庇瑞は義州の統軍亭へ駈つけ、憔悴した宣祖王の竜顔を拝した。

「わたくしのこうして居りますからは、どうかお心をお休めなさりとうございます。」  
宣祖王は悲しそうに微笑した。

「倭将は鬼神よりも強いと云うことじや。もしそちに打てるものなら、まず倭将の首を断つてくれい。」

倭将の一人——小西行長はずっと平壤の大同館に妓生桂月香を寵愛していた。桂月香は八千の妓生のうちにも並ぶもののない麗人である。が、国を憂うる心は髪に

挿した玫瑰の花と共に、一日も忘れたと云うことはない。その明眸は笑っている時さえ、いつも長い睫毛のかげにも悲しい光りをやどしている。

ある冬の夜、行長は桂月香に酌をさせながら、彼女の兄と酒盛りをしていた。彼女の兄もまた色の白い、風采の立派な男である。桂月香はふだんよりも一層媚を含みながら、絶えず行長に酒を勧めた。そのまた酒の中にはいつの間にか、ちゃんと眠り薬が仕こんであつた。

しばらくの後、桂月香と彼女の兄とは酔い伏した行長を後にしたまま、そつとどこかへ姿を隠した。行長は翠金の帳の外に秘蔵の宝剣をかけたなり、前後も知らずに眠っていた。もつともこれは必ずしも行長の油断したせいばかりではない。この帳はまた鈴陣である。誰でも帳中に入ろうとすれば、帳をめぐつた宝鈴はたちまちたたましい響と共に、行長の眠を破つてしまう。ただ行長は桂月香のこの宝鈴も鳴らないように、いつのまにか鈴の穴へ綿をつめたの知らなかつたのである。

桂月香と彼女の兄とはもう一度そこへ帰つて来た。彼女は今夜は繡のある裳に籠の灰を包んでいた。彼女の兄も、——いや彼女の兄ではない。王命を奉じた金庇瑞は高々と袖をからげた手に、青竜刀を一ふり掲げていた。彼等は静かに行長のいる翠金の帳へ

近づこうとした。すると行長の宝剣はおのずから鞘さやを離れるが早いか、ちようど翼つばさの生えたように金將軍きんしょうぐんの方へ飛びかかって来た。しかし金將軍は少しも騒さわがず、咄嗟とつさにその宝剣を目がけて一口の唾つばを吐きかけた。宝剣は唾にまみれると同時に、たちまち神通力じんつうりきを失ったのか、ばたりと床ゆかの上へ落ちてしまった。

金応瑞きんおうずいは大いに吼たけりながら、青竜刀の一払いに行長の首を打ち落した。が、この恐しい倭将わしやうの首は口惜くやくしそうに牙きばを噛かみ噛かみ、もとの体へ舞い戻ろうとした。この不思議を見た桂月香けいげつこうは裳もすその中へ手をやるや否や、行長の首の斬り口へ幾いくつか掴つかみも灰を投げつけた。首は何度飛び上つても、灰だらけになった斬り口へはどうとう一度も据すわらなかつた。

けれども首のない行長の体は手さぐりに宝剣を拾ひろったと思うと、金將軍へそれを投げ打ちにした。不意ふいを打たれた金將軍は桂月香を小腋こわきに抱えたまま、高い梁はりの上へ躍り上つた。が、行長の投げつけた剣は宙に飛んだ金將軍の足の小指を斬り落した。

その夜も明けないうちである。王命を果した金將軍は桂月香を背負いながら、人気ひとけのないう野原を走っていた。野原の涯はてには残月が一痕いっこん、ちようど暗い丘のかけに沈もうとしているところだった。金將軍はふと桂月香の妊娠にんしんしていることを思い出した。倭将の子は毒蛇どくじやも同じことである。今のうちに殺さなければ、どう云う大害かちを醸かもすかも知れない。

こう考えた金將軍は三十年前の清正のように、桂月香親子を殺すよりほかに仕かたはないと覺悟した。

英雄は古来センチメンタリズムを脚下に蹂躪する怪物である。金將軍はたちまち桂月香を殺し、腹の中の子供を引ずり出した。残月の光りに照らされた子供はまだ模糊とした血塊だった。が、その血塊は身震いをする、突然人間のよう大声を挙げた。「おのれ、もう三月待てば、父の讐をとつてやるものを！」

声は水牛の吼えるように薄暗い野原中に響き渡った。同時にまた一痕の残月も見見る見る丘のかげに沈んでしまった。……

これは朝鮮に伝えられる小西行長の最期である。行長は勿論征韓の役の陣中には命を落さなかつた。しかし歴史を粉飾するのは必ずしも朝鮮ばかりではない。日本もまた小児に教える歴史は、——あるいはまた小児と大差のない日本男児に教える歴史はこう云う伝説に充ち満ちている。たとえば日本の歴史教科書は一度もこう云う敗戦の記事を掲げたことはないではないか？

「大唐の軍將、戦艦一百七十艘を率いて白村江（朝鮮 忠清道 舒川県）に陣列れり。戊申（天智天皇の二年秋八月二十七日）日本の船師、始めて至り、

大唐の船師と合戦う。日本利あらずして退く。己酉（二十八日）……さらに日本の乱伍、中軍の卒を率いて進みて大唐の軍を伐つ。大唐、便ち左右より船を夾みて繞り戦う。須臾の際に官軍敗績れぬ。水に赴きて溺死る者衆し。艦舳、廻旋することを得ず。」  
 （日本書紀）

いかなる国の歴史もその国民には必ず栄光ある歴史である。何も金將軍の伝説ばかり一粟に価する次第ではない。

（大正十三年一月）

# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 金将軍

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>